宗教伝統における聖典の意味構造（2）

「語られる聖典」とその伝承

天理大学名誉教授
おやさと研究所嘱託研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

宗教概念の歴史・文化的なバイアス

現代宗教学の聖典研究において、「語られる聖典」（spoken scripture）の視座を導入したのは、ハーバード大学の宗教学者、ウィリアム・グラハム（William A. Graham 1943～）であった。グラハムは1987年、『書かれた言葉を超えて』を出版した。[(1)] イスラームを専門とする彼がその著書を出版した当初、彼の研究はほとんど注目されなかった。ところが、1990年代に入って、宗教概念の再考という現代宗教学の研究動向の中で、次第に研究者たちの関心を惹くようになった。20世紀後半、ハーバード大学のウィルフレッド・C・スミス（Wilfred Cantwell Smith 1916-2000）は、シカゴ大学のミルチャ・エリアーデ（Mircea Eliade 1907～1986）とともに、アメリカの宗教学界を、さらには世界の宗教学界をリードしたが、グラハムはスミスのもとで学び、その薫陶を受けた。

グラハムによれば、宗教学の概念的枠組みは必然的に「暫定的な性格」をもつという。このことは、もちろん聖典理解にも当てはまる。宗教学の語彙や概念的枠組みは、近代西洋という歴史・文化的なバイアスを伴っている。異文化における宗教を理解するには、ウィルフレッド・スミスが説いたように、宗教伝統に生きる人々の信仰的コミットメントに沿って、信仰を共感的に理解しようとする解釈学的な研究姿勢が求められる、とグラハムは強調する。

口頭伝承される聖典

シカゴ大学教授の宗教学者ジョナサン・Z・スミス（Jonathan Z. Smith 1938～2017）は、「宗教のデータは存在しない。宗教とはただ、研究者の研究の産物にすぎない」と述べた。[(2)] ジョナサン・スミスが指摘したように、これまでの宗教研究では、宗教の「比較」という方法的操作によって、宗教の具体的な宗教文化的コンテクストを考慮することなく、むしろ宗教をそのコンテクストから切り離して理解しようとするきらいがあった。たとえば、エリアーデが宗教伝統のコンテクストをあまり考慮することなく、世界の諸宗教をいわゆる「ヒエロファニー」（聖体示現）の概念によって解明しようとしたことは広く知られている。こうした宗教研究の姿勢をジョナサン・スミスは批判したのだ。

ただ、ここで留意しなければならないことは、決して「宗教のデータ」が存在しないのではなく、宗教学者の解釈を支えるデータの素材的契機そのものは存在するという点である。この点については、すでに論じたこともあるので、これ以上は論じないが、「宗教のデータ」の素材的契機を宗教伝統のコンテクストから切り離して解釈するとき、それはとかく「研究者の研究の産物」になってしまう危険性を孕んでいる。[(3)]

このことは聖典理解についても言える。たとえば、イスラームの宗教伝統においては、『クルアーン』は日々の祈りの場で、イスラーム教徒によって暗誦されてきた。ヒンドゥー教の伝統でも、『ヴェーダ』聖典が日々、プージャー（礼拝供養）の中で、ヒンドゥー教徒によって暗誦されてきた。世界の宗教伝統では、聖典がこのように世代を超えて信仰者のあいだで伝承されてきたのだ。これまで数多くの聖典研究において、研究対象は専らエクリチュール（書き言葉）としての聖典であった。グラハムの恩師であったウィルフレッド・スミスは、宗教伝統を理解するためには、信仰者の目線に立った信仰の共感的理解が不可欠であることを強調した。イスラームを専門とするグラハムは、『クルアーン』をイスラーム伝統のコンテクストに位置づけて、聖典がイスラーム教徒によって世代を超えて暗誦されてきたという事実、すなわちパロール（話し言葉）としての聖典の重要性に注目した。

聖典の記憶とその精確さ

筆者は1983年の秋から1年間、ハーバード大学へ提出する学位論文の資料収集のために、インドへ留学した。グラハムも『クルアーン』のパロール性を研究するために、同年の秋学期、ハーバード大学からサバティカル休暇を取って、インドのプーナに滞在した。1週間あまり、プーナでグラハムと一緒に研究した。筆者は『ウパニシャッド』聖典の解釈学として展開したヴェーダーンタ哲学が、インドの人々のあいだで、具体的にはシャンカラ派（別名、スマールタ派）の宗教伝統において、いかに受容されてきたのかを宗教現象学的な視座から考察しようと考えていた。その宗教伝統は、インド最大の哲学者と言われるシャンカラ（Śaṅkara 700～750）を開祖とする。『ウパニシャッド』聖典はシャンカラ派のパンディット（伝統的な教師）たちによって、世代を超えて口頭伝承されてきた。聖典の暗誦という宗教現象は、天理教における原典「みかぐらうた」の意義を研究するうえでも、筆者の学的関心を曳いてきた。

ハーバード大学の恩師で、インド哲学の世界的権威であったダニエル・インゴルス（Daniel H.H. Ingalls 1916～1999）からは、インド留学前に「インドには、聖典を暗誦しているパンディットがいるので、学ぶべきことが多いだろう」との教示を得ていた。プーナでは当時、インドでよく知られていたパンディット、シュリーニヴァーサ・シャーストリー（Śrīnivāsa-śāstrī）という碩学から、シャンカラのヴェーダーンタ哲学を学んだ。プーナに滞在中、シャンカラが著したサンスクリット語の哲学書『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド注解』（*Bṛhadāraṇyakopaniṣadbhāṣya*）を一緒に読んでもらった。

シャーストリー師の6畳ほどの書斎には、1冊の本もなければ机もなかった。部屋の真ん中に、ただ一つの座布団が置かれ、師はその座布団に座った。筆者はその前にサンスクリット語の哲学書を持って、胡坐をかいて座った。師は何も持ってはいなかった。テクストを全て暗記していたからだ。教えを受けるようになって、ほぼ1カ月が経ったとき、思い切って尋ねてみた、「ほんとうにこの聖典全体を暗記しておられるのですか」、と。その結果、当日は師の聖典暗誦を聴聞することができた。師の口から語り出される聖典のコトバは、筆者が持っていた哲学書の内容と全く変わらなかった。サンスクリット語では、「言葉」は「シャブダ」（śabda）と言う。それは「音」（sound）であると同時に「文字」（word）を意味する。師の口から語り出される聖典のコトバは、まさに哲学書の「音」であり「文字」でもあった。長年にわたり世代を超えて継承されてきた聖典の記憶とその精確さに関する体験は、筆者のインド思想研究、シャンカラ派研究の原点となった。また、そのときの体験は、原典「みかぐらうた」とその意義を掘り下げて研究する学的刺戟になってきた。

聖典のパロール性あるいは口述性は、宗教の違いを超えて共通の意味構造をもっている。従来の聖典研究では、「書かれた聖典」だけが注目されてきたこともあり、宗教伝統における「語られる聖典」の意義を宗教研究の視野から落ちこぼしてきたと言えるだろう。宗教伝統における聖典の意味を理解するためにも、具体的な宗教的コンテクストとその信仰的コミットメントに注目しながら、聖典の意味構造を理解することが不可欠であると言わなければならない。

［註］

(1) William A. Graham, *Beyond the Written Word*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987.

(2) Jonathan Z. Smith, *Imagining Religion: From Babylon to Jonestown,* Chicago: The University of Chicago Press, 1982, p. xi.

(3) 澤井義次『ルードルフ・オットー　宗教学の原点』慶應義塾大学出版会、2019年、19～20頁。